

精神病院のないイタリア地域社会研究

～地域の行政・企業・市民団体と

障がい者雇用に関する調査・

視察報告を中心に～

別府大学国際経営学部

准教授 中道 眞

はじめに

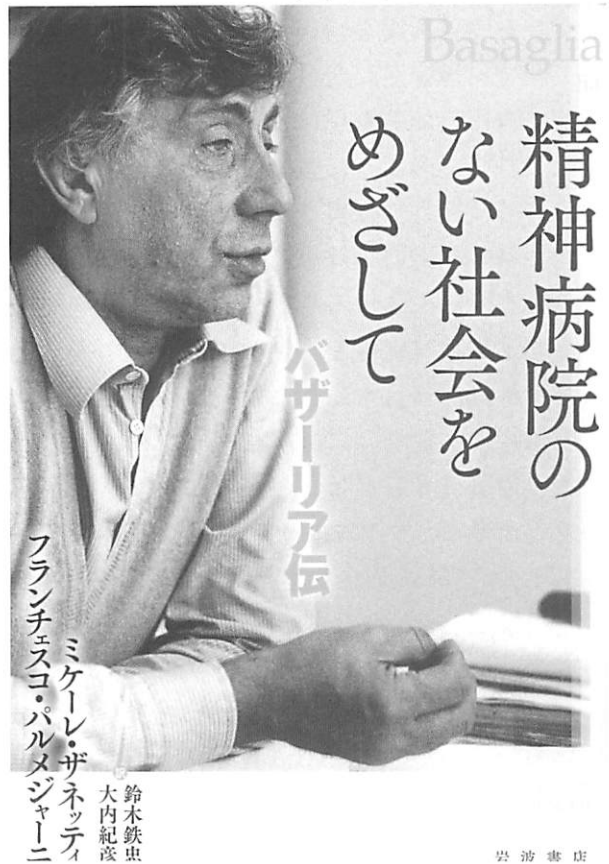
～もうひとつの世界をめざして～

市民社会組織の国際連合体である世界社会フォーラムの合言葉「もうひとつの世界は可能だ (Another world is possible)」は、「いまの」世界ではなく、もうひとつの別の世界を目指して活動する標語となっている。「いまの」世界とは新自由主義 (ネオリベラリズム) による市場万能主義の世界であり、多国籍企業などの大企業や新自由主義を推進する政府や国際機関が一体となって、経済と金融のグローバル化を推進することが人々の生活を豊かにするという主張の世界である。

経済と金融のグローバル化へのオルタナティブを提唱する「オルター・グローバリズム」とも呼ばれているこの市民社会組織連合体は、国際的にも各国内においても「いまの」世界は人々の生活を豊かにするどころか貧しくし、地球規模から個人に至るまでの経済に関する、あるいは社会に関する多くの深刻な問題の原因そのものであると主張している。

ところで、社会に関する多くの深刻な問題のひとつに、精神障がい者への社会的排除がある。「いまの」世界では、精神病院を地域社会から分離して設置し、精神障がい者をそこに入所させて管理・隔離してきた。この問題に対してもうひとつの世界からは、障がい者の社会的包摂および労働統合 (Work Integration) とも関連して、精神病院を閉鎖して地域社会で精神障がい者に生活してもらうことを提示している。

図表1 『精神病院のない社会をめざして
バザーリア伝』表紙とバザーリア氏



(注) ミケーレ・ザネッティとフランチェスコパルメジャーニ著の日本語訳 (岩波書店、2016年)。

1 地域社会視察の背景と180号法

今回の地域社会視察は、2017年3月、精神病院を廃絶したイタリア、特に北イタリアのトリエステを中心に訪問・調査した。トリエステ県行政の後押しとフランコ・バザーリア (Franco Basaglia) 氏と若い医師たちで構成されたチームによって、トリエステはイタリアにおいて初めて精神病院を廃止した場所である。図表1『精神病院

のない社会をめざして『バザーリア伝』表紙(ケーレ・ザネッティ・フランチェスコパルメジャーニ著、岩波書店、2016年)の写真がバザーリア氏である。詳しくは、精神病院のない社会をめざした活動の詳細な記録でもある同書を参照頂きたいが、イタリアの180号法のみを確認しておきたい。

1978年5月、180号法「自発的および強制的な病状確認と保健医療処置」(通称バザーリア法)が可決され、イタリアの精神医療は変革された。これによって、精神医療はこれまでの治安モデル(精神病院に隔離して管理する等)から適切な治療やケアを受け健康を回復するための人間の権利として明確に規定された。冒頭の「病状確認と保健医療措置は自発的意思によるものとする」は、治療はこれまでのように強制ではなく、当事者である患者の自発性に転換されたことを意味する。

また、精神病院の入院患者を地域のなかで生活できるようサポートするものであり、精神病院に代わって地域精神保健を推進して旧病院の人材をそのまま地域に移行することが勧奨された。患者の入院治療が必要な時には総合病院内の病床で行われる(前著、インタビュー調査および石川かおり・葛谷玲子「イタリアにおける地域精神保健医療システム」『岐阜県立看護大学紀要』12(1)、2012年を参照した)。

今回のイタリア地域社会視察は、筆者が馬頭忠治教授(鹿児島国際大学経済学部)の調査チーム(科研課題26380496「障がい者・社会的弱者の就労支援と企業の社会的責任」)に加えて頂くことから始まった。筆者の研究分野は経営学、特に国際経営論であるが、経済学へ広げてみても経営・経済の分野において、障がい者あるいは障がい者雇用の研究はほとんど見当たらない。

世界的にみても、もちろん日本でも、企業等の事業主は「障害者雇用促進法」において障がい者を雇用する義務が課されているにも関わらず、その実態は当該企業への直接雇用は少ない。馬頭教授の科研課題報告書にも「障害者雇用促進法のように、その雇用率の未達成の場合は、雇用納付金を納める等の企業へのオブリゲーションを課す制度しか作れなかったのは、いわば必然であった」と記されているように、「いまの」世界の歴史的

構造上に限界があった。

日本では「特例子会社」という制度が考案され、そこで雇用して雇用率をクリアしているか義務を果たせていない実態がある。厚生労働省の平成29年集計結果発表によると、特例子会社での雇用も含めた実雇用率が改善してきているとはいえ、未だ1.97%と法定雇用率の2.0%を下回っている。なお、平成30年4月1日以降、障害者雇用率制度の法定雇用率が、民間企業2.2%、国・地方公共団体等2.5%、都道府県等の教育委員会2.4%へ、それぞれ0.2%引き上げられる。また民間企業の対象範囲が、従業員50人以上から45.5人以上に変更となるなど、障がい者雇用の改善に向けた取り組みは拡大している。

本稿の最後に若干触れるが、詳しくは拙稿「企業経営と福祉経営の統合に関する特例子会社の役割と可能性—社会福祉法人・太陽の家と特例子会社—」(重本直利編『ディーセント・マネジメント研究—労働統合・共生経営の方法—』晃洋書房、2015年、第1章、pp.15-29.)において、「障害者雇用比率」の上昇と特例子会社の関係性を中心に論じたので是非ご参照頂き、忌憚のない御意見を頂けたら幸いである。

このような経緯から、地域社会において障がい者を受け入れることに関して、世界でも最も先進的な取り組みをしているひとつであるイタリア視察へ赴き現地にて訪問調査をおこなった。そのイタリアにおける調査記録を中心に、若干のエピソードなども加えて、以下、記すこととしたい。

2 地域社会視察の概要

今回の北イタリア地域社会と障がい者に関する調査・視察では、凡そ7ヵ所を訪問した。馬頭教授のチームとイタリアのヴェネチア近郊メスカルのホテルで3月7日早朝に合流した。以下、訪問調査した日程順に訪問先を列挙すると、

- ・当事者団体“alticolo32”ミーティングへの参加による実態調査および視察
- ・B型社会的協同組合 La Collina 運営のレスト

- ラン Posto delle Fragole 視察
- ・ B 型社会的協同組合 CO.A.L.A. 視察
- ・ トリエステ精神保健局バルコラ精神保健センター訪問調査
- ・ フランコ・バザーリア協会ボランティアの集い参加による実態調査および視察
- ・ サン・セルヴォロ島精神病院博物館視察
- ・ 社会的協同組合コーパップス (COpAPS) 訪問調査

の合計7カ所を訪問した。トリエステに2日間滞在して5カ所、ヴェネチア1カ所、ボローニャ郊

外1カ所である。地域の行政・企業・市民団体と障がい者雇用に関する調査に直接関係しない、製本工房「イル・パピーロ」や筆者独自に日本貿易振興機構現地事務所なども訪問したが、本稿では割愛し、別の機会に報告させて頂きたい。

詳しい訪問日程と訪問先情報は、図表2「北イタリア地域社会と障がい者に関する視察日程等」を参照頂きたい。この図表2は、訪問に先立って通訳兼ガイドを頂いたフィレンツェで活動している岡田美苗氏が作成頂いたものを、筆者が本稿用に加工したものである。各訪問先がウェブサイトを開設している場合が多いので、URLも明記さ

図表2 北イタリア地域社会と障がい者に関する視察日程等

行 程		
3月7日(火)	トリエステ	<p>当事者団体 “alticolo32” ミーティングへの参加による実態調査および視察 住所：Via De Pastrovich 1, 34127 Trieste Padiglione M URL：http://www.parcodisangiovanni.it/content/articolo-32 tel.: 040 399 7354 E-mail：triestearticolo32@gmail.com</p> <p>B 型社会的協同組合 La Collina 運営 Posto delle Fragole 視察 URL：http://www.ilpostodellefragole.eu/</p> <p>B 型社会的協同組合 CO.A.L.A.視察 住所：Via C. Battisti, 2, 34100 TRIESTE tel：040. 3479980 URL：http://www.coalaweb.it/ 理事長 Massimo zapparella 氏</p>
3月8日(水)	トリエステ	<p>トリエステ精神保健局 バルコラ精神保健センター視察 住所：CSM 1 Barcola - Viale Miramare 111 Luigi Marrazzo 氏 / Maurizio Rossi 氏</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ トリエステ精神保健局の紹介（方針、組織構成、活動、事業、役割など） ・ 地域を担う精神保健センターの紹介（役割、組織構成、24時間体制のサービス内容など） ・ équipe（チーム）での仕事内容の紹介 <p>再度 B 型社会的協同組合 La Collina 運営 Posto delle Fragole 視察</p> <p>フランコ・バザーリア協会 ボランティアの集い視察 Associazione Franco Basaglia 住所：Via Bottacin 4, lo Spazio Rosa all'interno del Parco di San Giovanni 理事 Massimiliano de Walderstein 氏 (m.dewalderstein@libero.it) URL：http://www.parcodisangiovanni.it/content/associazione-franco-basaglia</p>
3月9日(木)	ヴェネチア	<p>サン・セルヴォロ島精神病院博物館視察 URL：http://museomanicomio.servizimetropolitani.ve.it/en/</p>
3月10日(金)	ボローニャ	<p>社会的協同組合コーパップス (COpAPS) 視察 住所：Via Maranina, 36 - 40037 Sasso Marconi (BO) tel. 051 845406 理事長 Lorenzo Sandri 氏 URL：http://www.copaps.it/ 井上ひさし氏の「ボローニャ紀行」で取り上げられている半農半学の教育農園</p>
3月11日(土)	フィレンツェ	<p>製本工房「イル・パピーロ」等視察</p>

れている。イタリア語が主で一部英語でも閲覧可能なサイトであるが、印象的な写真などが多数参照できるので、是非各サイトへアクセスして頂きたい。次いで日程順に、各訪問先での調査・視察内容を記すこととしたい。

3 トリエステの概要とトリエステ精神保健局

トリエステに到着してすぐに、最初の視察先であるトリエステ精神保健局の入っている建物に向かった(写真1)。当事者団体“alticolo32”ミーティングは、その建物の一室で開催されるためである。

トリエステ市街から車で15分ほど行ったところにトリエステ精神保健局のひとつがある。トリエステは、スロベニアとの国境にあるフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州の州都で、人口約24万人、トリエステ独自の方言がある県である。独自の文化はオーストリアに統治されていた歴史と無関係ではなく、ザッハトルテが有名で「小さなウィーン」とも呼ばれている。また風の街ともいわれ、その風はボーラ(Bora)と呼ばれている。

ところで、トリエステ精神保健局の建物は、旧サンジョバンニ病院の一画にある。同病院は、20ヘクタールの急斜面にある敷地の中を22の病棟として使っていたが、それらが現在、トリエステ大学学部校舎、幼稚園、中学校、老人施設、教会、

バラ園、劇場、グループホーム、今回訪問する精神保健局や軽食が食べられるレストラン「Posto delle Fragole」に改築され、トリエステの若者はここが病院であったことさえ知らないという(訪問時インタビューと濱田恭子「精神科病院のないイタリアの町を訪れて」『鹿児島大学医学部保健学科紀要』23(1)、2003年を参照した。以下同様)。

建物の入口(写真1)には、向かって右に精神保健センターの看板、左にWHO精神保健協力センターの看板がある。バザーリア氏の改革から現在、トリエステはWHOによってパイロット地区に指定され、地域精神保健の優れた取り組みを世界に広めていく一大拠点となっている。その事務所が入っている建物である。

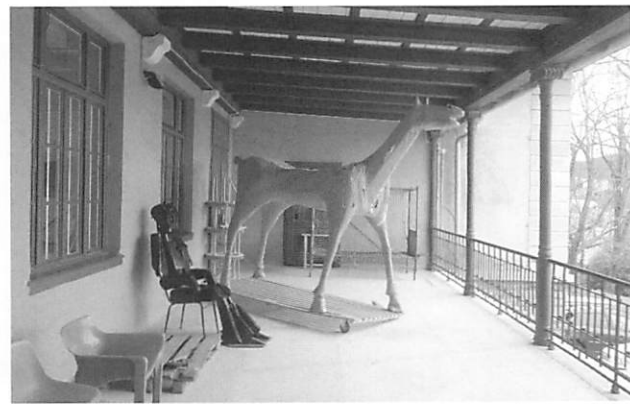
入口を入るとすぐに青い大きな馬が目に入った(写真2)。この馬はマルコという名前があるらしく、トリエステ精神保健のシンボルであるという。2014年11月22日に大阪で開催されたイタリア精神科医ロベルト・メッツィーナ氏の講演メモによると「精神病院にいたマルコが地域に出て行く。そのまわりに人々のつながりが出来ている。トリエステで最初に作られた『グループで住む』人たちの写真。一緒に山登りなどしていた」と記されている(みわよしこ『取材メモ：イタリア・トリエステの精神医療に関する講演』<https://news.yahoo.co.jp/byline/miwayoshiko/20141122-00040914/>、2014年)。精神病院から出て、地域社会で生きる勇気と希望の象徴となっている馬である。

写真1 ミーティング会場のトリエステ精神保健局の建物入口



(注) 筆者撮影。右の看板に精神保健サービス、左の看板に WHO 精神保健協力センターの看板がある。

写真2 トリエステ精神保健局の建物にある大きな馬のひとつ



(注) 筆者撮影。精神保健局のバルコニーにある。近くの中庭にも黒い馬など複数ある。

4 当事者団体“alticolo32”ミーティングへの参加による実態調査および視察

さて、当事者団体“alticolo32”ミーティング会場に入ると既に数人のミーティング参加者が談話していた。私たち調査グループが挨拶をすると、元英語教師の参加者が早いスピードの英語で話しかけてきた。彼女は自身の精神疾患と長期にわたって向き合っており、このミーティングを毎回楽しみにしているという。

“alticolo32”は2007年に結成されたグループであり、参加者の多くは精神障がいに悩まされているが、病院に閉じ込められることなく、街や家で自分がいられることについて、バザーリア氏に感謝しているグループだという。アソシエーションでもなく、市民に開放されたフォーラムのようなもので、自主的治癒を目指すグループでもなく、精神障がい悩む市民が情報共有する開放的グループであるという。精神障がい者もちろん参加しているので、本人や参加している精神科医、ソーシャルワーカーなどの意見も反映しているという。運営は、プロタゴニズモ(主人公主義)でなされている。“alticolo32”というグループ名は、イタリア憲法第32条の国民健康保障からつけられた。

毎週火曜日に開催しており、全員自発的参加者で構成されているという。写真3の学生たちは心理学などを専攻する大学生で、右上は参加している精神科医である。訪問した日は、イタリアの放送局から取材に来ていたが、度々来るらしく、参加者たちは慣れているようであった。

広い部屋で、椅子で円を作って、各参加者が基本的に順番に自ら話したいことを話し、笑顔と笑い声が絶えない終始楽しいミーティングであった。地域に暮らす人々が集まって情報交換し、精神障がい悩む人たち、学生、医師などの専門家、メディアなどがそれぞれの立場から発言とリプライを繰り返しながら生活している一部として存在し、また、精神障がい者へ人としての尊厳が担保されている様子が印象的であった。

写真3 “alticolo32”ミーティングの様子



(注) 筆者撮影。ミーティングに参加していたボランティアの学生たち。私たちの訪問した日にイタリアの放送局から取材に来ていた。

5 B型社会的協同組合 La Collina 運営のレストラン Posto delle Fragole 視察

次いで、旧サンジョバンニ病院の一面にあるB型社会的協同組合 La Collina 運営のレストラン Posto delle Fragole へ昼食も兼ねて訪問した。

訪問記の前に、いくつか確認しておく必要がある。まず「協同組合」についてである。憲法第1条で「イタリアは労働を基礎におく民主共和国である」と宣言されているように労働立国である。そして第45条にて「共和国は、相互扶助の性格を持ち、私的投機目的のない協同組合の社会的機能を承認する」と協同組合の地位も規定されている。

したがって、日本とイタリアの協同組合はかなり異なっていることに留意する必要がある。イタリアの協同組合は、日本では広い意味での「私企業」に分類されよう。日本では中小企業に分類される場合でも、イタリアでは協同組合として経営している場合が多い。

例えば、優れた技術をもつ中小企業がイタリアには多いが、正確にはその多くは協同組合の形式をとっていることでも、その違いが明らかであろう。イタリアでの労働は企業労働というよりも、むしろ協同組合などが、特に地域組織や中小組織

図表3 社会的協同組合A型とB型

	A型協同組合	B型協同組合
目的	個人・家族の状態もしくは社会的状態に関わって社会的援助の必要な人々への支援	社会的に不利な立場の人々(注1)の労働統合
事業内容	社会・医療サービス、教育サービスの提供	多様な事業(農業、工業、商業もしくはサービス)
社会統合	社会的に不利な立場の人々(注1)の労働者を30%以上にする義務なし	労働者(組合員、非組合員合わせて)の少なくとも30%は社会的に不利な立場の人々で構成しなければならない
組合員(注2)	労働を提供し報酬を受ける従事組合員 ボランティア組合員(注3) 利用組合員もしくはサービスの利用者	従事組合員(社会的に不利な立場の人々および健常者) ボランティア組合員(注3)
財政優遇	右の様な優遇策は適用されない	社会的に不利な立場の人々の報酬に関する社会保障等の組合(事業主)負担はゼロとする(L.381/91第4条)

(注) 1. 社会的に不利な立場の人々とは、アルコール中毒者、受刑者・元受刑者、身体障がい者、精神・感覚障がい者、年少者、精神病患者、薬物依存者、その他社会的排除状態の人々をいう(L.381/91第4条)。
 2. 組合員には、表に明記した場合以外に、組合への資金支援目的の個人・組織および公共団体もある。定款に「基金の設立」規定を設けることで、これらを導入できる。公共団体の加入資格は、その規約(条例など)で、社会的協同組合を支援する旨の規定が書かれていることが必要である。
 3. ボランティア組合員は、これまでの他の協同組合にはない新しい特徴となっている。ボランティアは労働を無償で提供しなければならないが、労災や職業病が適用され、活動実費は支払われる。A型にあっては、ボランティアの仕事は「補足的であるべきであって、既存法で必要とされる専門家の仕事の範囲にとって代わるものであってはならない(法第2条第5項)」と規定されている。
 (出所) 岡安喜三郎『イタリアの社会的協同組合の歴史と概要』第43次欧州労働者福祉視察事前研修会資料、協同総研、2011年7月、pp.3-4を参考に筆者一部修正して作成。

の場合は一一般的である。逆に、労働といえばほぼイコール企業労働となっている日本が世界的にみれば特殊とってよいであろう。

もうひとつは「B型」についてである。イタリアでは社会的協同組合はA型とB型に分類されている。詳細は図表3にまとめたので参照されたいが、A型と比較してB型は多様な事業に対応しており、障がい者雇用に関する協同組合のほとんどはB型である。

さて、B型社会的協同組合 La Collina が運営するレストラン Posto delle Fragole は、今回2回訪問した。写真4は建物と入口である。旧サンジョバンニ病院の再開発で周辺と同じクリーム色の建物であり、旧病棟のひとつを改装して運営している。最初に訪問した時は、写真5のように屋内のテーブルにて調査チーム全員でそれぞれパスタを食した。とても美味であった。店内のテーブルは満席で盛況であり、入口のガラスケースに

写真4 La Collina 運営レストランの入口



(注) 筆者撮影。再開発で周辺と同じクリーム色の建物でレストランを運営。右上にレストランの看板が出ている。

写真5 レストラン Posto delle Fragole の料理



(注) 筆者撮影。屋内のテーブルで調査チームの昼食で注文したバジルのパスタ。屋外にもテーブルがあり、市中心部から少し離れているがお客さんでぎわっていた。

入っているパニーニを持ち帰りで購入する人々でレジは込み合っていた。

翌日にも訪問したが、満席であったため、パニーニなどを注文して外のテーブルで食した。風でナプキンなどが飛ばされながら食したが、これもまた美味であった。ベッドのねじを外して飲み込むということで拘束されていた患者が、レストランのオーナーをしているという（濱田、前掲論文などを参照）。レジ係や従業員もテキパキと動いており、とても気持ちのよいレストランであった。

6 B型社会的協同組合 CO.A.LA. 視察

続いて、同じB型社会的協同組合のCO.A.LA.を訪問した。トリエステ中心部から10分ほどの場所にあるアドリア海に面した場所にある（写真6）。正式名称は、「Società Cooperativa Sociale Arte e Lavoro」である。1997年にトリエステに設立した協同組合であり、正式名称からも推察されるように、アートと仕事に関して、労働統合と障がい者の就労支援を目的に設立された。協同組合のキャラクター「コアラ」が印象的である（写真7）。

設立後、組合員の要望から事業を拡大し、自宅での買い物支援、代理配送、アート支援や図書の貸し出・配布、音楽会や朗読会なども開催してい

写真6 B型社会的協同組合CO.A.LA.の入る建物



（注）筆者撮影。事務所と運営するカフェを中心に訪問した。

写真7 B型社会的協同組合 CO.A.LA. 理事長の名刺とキャラクターの「コアラ」



（注）理事長マッシモ・ザッパレラ氏の名刺を筆者撮影。

る。また視覚に障がいをもつ人々の連合体と共同で「ソーシャル・ツーリズム」や視覚に障がいをもつ人々が働けるカフェも運営している（写真8）。

エスプレッソなどで世界的に有名なイタリア多国籍企業イリー社 (illycaffè S.p.A) 発祥の地でもあるトリエステでは、イリー社も障がい者が働ける環境整備に協力している（写真10）。ただし、無償提供ではなくカフェから改良をリクエストして改良した機械を購入したという。その機械で入れてもらったエスプレッソを注文して飲みながら、障がい者の組合員たちが製作した絵画や作品を鑑賞させて頂いた。作品のお蔭かは不明であるが、一般のカフェで飲む以上に美味であった。

余談だが、イタリア人なのかトリエステの人だけなのか不明だが、砂糖をたっぷり入れて飲む光景を良く見かけた。ここでそれを試してみたが大

写真8 CO.A.LA.が運営するカフェ入口



（注）筆者撮影。視覚に障がいをもつ人々が働く場所を提供している。

写真9 カフェでのインタビューの様子



(注) 筆者撮影。中央が組合員、右がマッシモ・ザッパレラ氏、左が調査チームメンバー。

変美味しく、この経験以降、普段はコーヒーに砂糖をいれないが、エスプレッソにはたっぷり入れて飲むようになった。

CO.A.L.A.での視察が終わった頃、既に夕暮れとなっていたので、理事長マッシモ・ザッパレラ氏と事務全般をしている事務員の方の誘いで、インタビューの続きは掛け持ちで理事をしているという別の協同組合へ移動することとなった。ちなみに実際の運営は事務全般をしている事務員の方が中心で、理事長はその方の方針と運営をサポートする役割をしているとのことであった。

LASE Soc. Coop. Socialeという社会的協同組合へ車にて2分ほどで移動し、併設のバルでインタビューの続きをおこなった。マッシモ・ザッパレラ氏のように、社会的協同組合に複数関わることの方が一般的で、1つの組合に専念することの方が少数派とのことであった。

写真11 LASE Soc. Coop. Sociale 入口の看板



(注) 筆者撮影。

写真10 カフェで使用するエスプレッソマシンの部品



(注) 筆者撮影。視覚に障がいをもつ人々でも操作できるようにイリー社が改良した部品のひとつ。

バルには、他の社会的協同組合の理事や組合員が出入りし、日常的にここで情報交換をおこなっているとのことであった。すぐ隣にはフットサル場があり、子供たちの声が響く中でのインタビューであり、時々ボールまで飛んできた。LASE Soc. Coop. Socialeという社会的協同組合の場所は、地域の施設が集まっており、市民の集う場所であった。

7 トリエステ精神保健局バルコラ精神保健センター訪問調査

1日目の早朝から夜に渡る視察を終え、2日も朝からトリエステ精神保健局バルコラ精神保健センターを訪問した。ここもトリエステ市街から車で10分ほどのところにあった。青い看板が道路

写真12 バルでのインタビューの様子



(注) 筆者撮影。中央がマッシモ・ザッパレラ氏。

写真13 トリエステ精神保健局バルコラ精神保健センター入口の道路に面した門にある看板



(注) 筆者撮影。

からはっきり見え、すぐに場所がわかった(写真13)。

ここでは、最初にルイジ・マラッツォ氏とマウリジオ・ロッシ氏に、ミーティング室にて、トリエステ精神保健局の方針、組織構成、活動、事業、役割など、地域を担う精神保健センターの役割、組織構成、24時間体制のサービス内容など、またチームでの仕事などについて伺った。

トリエステ精神保健局では、保健地区を4つに分けて活動している。このバルコラ精神保健センターは保健地区1であり、地区2はマッダレーナ同センター、地区3はドーミオ同センター、地区4はガンビーニ街同センターである。ここは8万人が対象の地区で、去年は年間980人が利用し、24時間体制の拠点である。午前8時から午後8時までは一般外来として運営し、午後8時から翌朝8時までは患者としてではなくオスピテ(お客さん)として対応する運営をしているという。段差の低い階段など障がい者に配慮した構造となっていた(写真14)。

ここでは38名のスタッフがチームを作って働いており、利用者(=当事者)を中心に、精神科医、臨床心理士、作業療法士(リハビリ担当)、

写真14 トリエステ精神保健局バルコラ精神保健センターの段差の低い階段



(注) 筆者撮影。

看護婦でチームを構成する。相談や食事、アクティビティなども提供し、緊急対応もするベッドは6床用意している(写真15)。また一般外来とオスピテ対応だけではなく、警察とも連携して予防医学的な活動もしているという。

トリエステ精神保健局全体の活動を列挙すると、①薬の処方、②面談、③ミーティングの場とオーガナイズ、④街に出て映画・劇場や遠足と一緒にいく、⑤4つの精神保健センターのネットワークでの活動、⑥社会的弱者(貧困・依存症など)への行政とネットワークでの活動、⑦市民との交流機会、⑧保健地区3(工業地帯・貧困・80%が公団住宅)の精神保健センターでの政策的保健活動、⑨プロタゴニズモ(週1回)の活動な

写真15 緊急避難用宿泊施設



(注) 筆者撮影。左がセンターの医師、右は調査チームメンバー。

写真16 センターの薬局



(注) 筆者撮影。ここで当事者に合わせて処方するという。

どが挙げられた。最後のプロタゴニズモは前日に訪問したセンターでの“alticolo32”などが該当する。

経済的な視点も重視しているという。例えば、ベッドの利用はここでは200ユーロであるが、病院で同じサービスを利用すると300から500ユーロが必要となり、行政のコスト削減と同時に利用者の利便性を向上させているという。

4つのセンターで各1,000人、合計約4,000人の年間利用者を局全体で200人のスタッフで対応している。薬・人件費・施設維持費で年間1,600万ユーロ、その他経費400万ユーロ、労働支援に40万ユーロ、社会活動に50万ユーロで運営しており、少なくとも現在は病院があった頃と同程度か少ない運営費で活動できているとのことであった。

次いで、活動における問題点なども伺った。脱施設化という段階は、少なくとも北イタリアの先進地区トリエステやトレントでは既に終わっており、現在は親が子供を見守るように、その人の健康そのものを考えていくという段階に入っているという。最近の活動を通じて見えてきたのは、経済状況の変化も影響しているが、病状が変化してきているためでもある。

またもうひとつの問題は、北イタリアは公的サービスが充実しているため、当事者本人が自立へ向かうのが難しいということがある。しかしゆっくりではあるが、全体としては社会において自立を目指す方向が見えてきているとのことであった。特に若い人への対応であるが、あまり精神医学的な診断をしないようにして、支援する方

向へ切り替えている。精神医学というよりもメンタル・ヘルスとして考えて、あまり関わり過ぎないことに留意しているという。可能なかぎりここ（精神保健局）に来るのではなく、社会的協同組合などのサービスを利用するよう促しているとのことであった。センターの入口に大きな掲示板があり、音楽会やヨガなど一般市民向けも含めて様々な市民イベント等のチラシが貼られていた（写真17）。

写真17 センターの入口にある掲示板



(注) 筆者撮影。音楽会やヨガなど様々な社会的活動が掲示されていた。

屋外にも多くのテーブルや椅子があり、お昼頃に視察が終わって屋外でインタビューを続けていると、利用者たちが屋外の施設も自由に使用していた。

8

フランコ・バザーリア協会ボランティアの集い参加による実態調査および視察

トリエステ精神保健局バルコラ精神保健センターの視察とインタビュー調査が終わった頃、昼食の時間になったので、昨日と同じB型社会的協同組合La Collina運営のレストランPosto delle Fragoleで昼食をとった。パニーニなどを買って屋外のテーブルで食べたがこれも大変美味であった。

何やら騒がしい集団がレストランにやってきた。様子を聞くと、どうやらトリエステ大学を卒業した学生のお祝いをしているとのこと。イタリアでは大学卒業が大変難しく、家族はもちろん、

友人・知人・同級生たちから、お祭り騒ぎで祝福を受けていた。卒業生は冠を被って、皆嬉しそうな笑顔が印象的であった。

旧サンジョバンニ病院の敷地内で、フランコ・バザーリア協会ボランティアの集いが開催されるので、徒歩で会場へ向かった。坂を上ってアーチ状の階段を上るとバラ園が遠くに見えてきた。バラ園を目指して少し歩くと、それまでのクリーム色の建物と違い、ピンク色の建物が見えてきた(写真18)。

写真18 ボランティアの集い会場入り口



(注) 筆者撮影。旧サンジョバンニ病院の一角にあり、窓からはバラ園が見える。電灯がともっており、集いを後にする時は既に夕暮れで暗くなっていた。

入口ですでに数人が談笑しており、中に入ると学生たちや赤ちゃんを連れた男性もいた。調査チームは席に案内されて、簡単な説明を受けた。この集いのリーダーであるカルラ氏は本業(玩具店)で遅れてくるので、詳しい説明や質問はその時以降にすることとなった。氏は1973年からボラ

写真19 ボランティアの集いの様子



(注) 筆者撮影。手前に調査チーム、そのまわりをボランティアたちが囲んでいる。入口は右側扉。窓際に立っているのが副理事長のマックス氏。

ンティアでフランコ・バザーリア協会に所属して活動を続け、精神保健局と連携しているという。

集いは毎週開催しており、今回の議題は皆でゲームをするという精神障がい者とのアクティビティの計画についてであった。私たち調査チームの来訪によって、今回の議題を中断し、自己紹介が始まった。新しい人が参加するといつもしているという。窓側に座っている人から順番に一言で紹介が続いた。

ティアラ氏は大学生でインターンをしていて、クリエイティブ部門で各家庭を訪問して活動している。マックス氏は副理事長でティアラ氏と同じ部門のコーディネーターをしており、このボランティアの集いでは4つの部門があるという。社会的協同組合アミコでも働いている。カルラ氏不在の中、マックス氏がリーダーを務めていた。アリチェ氏など6名は大学3年生で、専攻は心理学、現在インターンをしているという。年配の人と一緒に散歩したり音楽をしたりしている学生、特定の1人について活動している学生、4人の年配の人と一緒に活動している学生などであった。その他5年生や卒業後もインターンを継続している参加者、教育研究分野でバッグなどを一緒に製作している参加者、一般市民のフランチェスコ氏は若者を中心に予防的活動と企画の担当者など、自己紹介が続いた。

調査チームもそれぞれ自己紹介した頃、遅れてリーダーのカルラ氏が到着したので、この集いの概要説明と質疑応答に入った。

フランコ・バザーリア協会ボランティアの集いは1993年から始まって25年目の活動で、地域保健局と連携して活動しているという。偏見を辞めさせることと脱施設化の2つが目的である。活動対象は、障がい者はもちろん、移民や貧困に苦しむ社会的弱者全般である。トリエステ大学心理学部・教育学部・文学部と提携し、ローマ大学心理学部とも提携している。様々な社会的協同組合とも提携し、これらネットワークを使って、特定の人を様々な視点から情報共有することで、課題を発見していくという。

そして特に「労働」を重視しており、就労支援に尽力しているとのことであった。能力の表現が

伴う「労働」は社会的アイデンティティーである。働けるということは差別のラインであり、働ければその人は社会から認められていることになり、差別されにくいためであるという。経済的にも社会的にも重要である。そして、仕事は人を必要とするし、人は仕事で社会的にも自分自身でも認証されるとのことであった。制度的施設である精神病院に閉じ込められて作業をして、支給される週2個のたばこは労働の対価ではないと強調して説明された。

集いの時間の関係で、中断していた今回の議題を再開する必要があるため、調査チームは具体的なアクティビティの計画を少し聴講して集いを後にした。

9 サン・セルヴォロ島精神病院博物館視察

翌日の早朝、トリエステから列車でヴェネチアへ移動し、午後、ヴェネチア本島から約10分パボレット20番に乗ってサン・セルヴォロ島へ到着した。パボレットは船のバスのような乗り物で、自動車の入れないヴェネチアの一般的乗り物である。ちなみに、ヴェネチアは精神病院のないイタリアとなった原動力ともいえるバザーリア氏が生まれ育った場所である。

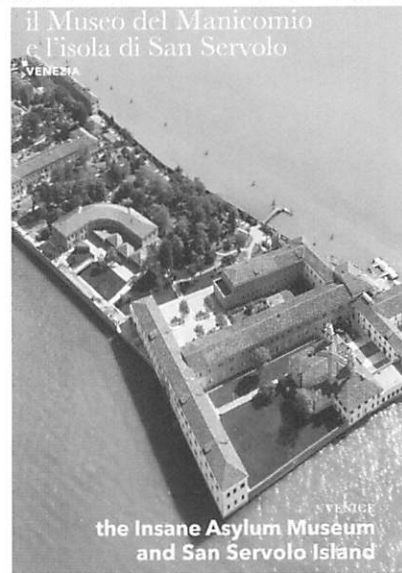
写真20 精神病院博物館入口



(注) 筆者撮影。反対側が船着き場で目の前に入口がある。

調査チームは本島で買ってきた数種類のパニーニを船着き場のゆったりした椅子で頬張ってから、すぐ横にある博物館入口へ向かった(写真

図表4 サン・セルヴォロ島全景



(注) サン・セルヴォロ島精神病院博物館パンフレット表紙。島には大学校舎やカフェ、公園などもあり宿泊施設が建設中であった。博物館は下の建物にある。

写真21 当時のヴェネチア地図と学芸員



(注) 筆者撮影。博物館学芸員の方が指さしている場所がサン・セルヴォロ島。

写真22 解剖室の中心にある解剖台



(注) 筆者撮影。この解剖台で実際に解剖していたという。

20)。図表4は博物館パンフレットの表紙である。サン・セルヴォロ島は本島から離れた場所であり、点々とした離島は今回訪問した精神病院、伝染病の病院、刑務所など、市民生活から隔離する

ために置かれていたと学芸員から説明された（写真21）。

内部は急で狭い階段が続き、当時の廊下の両側に様々な拘束具などが展示されていた。解剖台（写真22）のある解剖室では脳の標本が数多く並べられていた。当時、精神疾患の原因は脳の器質的問題にあると考えられていたからであるという。この考え方はバザーリア氏の改革当時まで主流であり続けた（ザネッティ、前掲書、p. 219）。

当時使用していた様々な器具や測定機械も展示されており多くはミラノ製などイタリアの機械産業が古くから優れていたことも確認できた。現在でもイタリア経済を担っているのは、ファッションでも食材でもなく、機械産業と言われている。

また薬の調合室は広く、数多くの瓶がならべられており、当時から薬が重要な役割を果たしていたことが明らかであった。最も印象的であったのは脳の標本よりも、入所直後と出所直前に撮られた写真が数多く展示されていたことである。多くは別人のようなその姿に驚いた。あまりにも衝撃的な写真が多いので本稿では掲載を割愛するが、関心のある読者は前掲図表2に掲載のURLから是非博物館のウェブページにアクセスして頂きたい。様々な写真がウェブ上にアップされており閲覧できる。

イタリアでは精神病院を廃止して以来、過去の誤った歴史を明確にするために、このような博物館を重視しているとのことであった。ショックの抜けないまま、パボレットから眺める夕日に照らされたサン・セルヴォロ島の景色を、美しさと残酷さの共存というあまり学術的ではない思いを抱きながら、世界でも有数の美しいヴェネチアの街へ帰途についた。

10 社会的協同組合コーパップス (COpAPS) 訪問調査

翌日朝、ヴェネチアのサンタルチア駅から列車でボローニャへ向かった。午後にボローニャ中央駅に到着し、再び列車で30分ほどかけてサツ・マルコニ駅にたどり着いた。ボローニャ市街の赤

図表5 井上ひさし『ボローニャ紀行』文庫版表紙とボローニャ市街



（注）文春文庫、2010年。単行本の初版は文芸春秋から2008年に出版された。

茶色の建物がひしめきあう景色（図表5）と違い、のどかな風景が広がっていた。タクシーを呼んでもらったが、町には2台しかタクシーがなく、出払っているため暫く来ないというので、COpAPSへ連絡し迎えに来てもらえることとなった。迎えが来るまでの間、駅のカフェで甘いエスプレッソを頂いたが、やはり甘い方が美味しく感じた。

COpAPSも人手が足りないらしく、理事長のロレンツォ・サンドリ氏自身が車を運転して迎えに来てくれた。車中にて活動の概要等や近隣の様子などを伺いながらCOpAPSの運営する農園に到着した。広大な農園である。COpAPSは、世界的に、農業と障がい者雇用を組み合わせた社会的組織モデルとなっており、日本でも井上ひさし氏の『ボローニャ紀行』で紹介されたことをきっかけに一般にも有名となった組合である（図表5）。

この本の「山の上の少年コック」の箇所でも半農半学の教育農園として紹介されている。本稿の読者も是非ご一読頂きたい。COpAPSはもちろん、ボローニャの機械工業、さらにはイタリアという共和制の国についてもわかり易く記述されている。

到着後、農園で理事長のロレンツォ・サンドリ氏から早速お話を伺った。1979年に設立し、訪問時では37年運営しているという。現在、56人が

図表6 COpAPSパンフレット(表紙)



(注) 「35」とあるのは下に小さな文字で「1979-2014」とあるように35年という意味である。

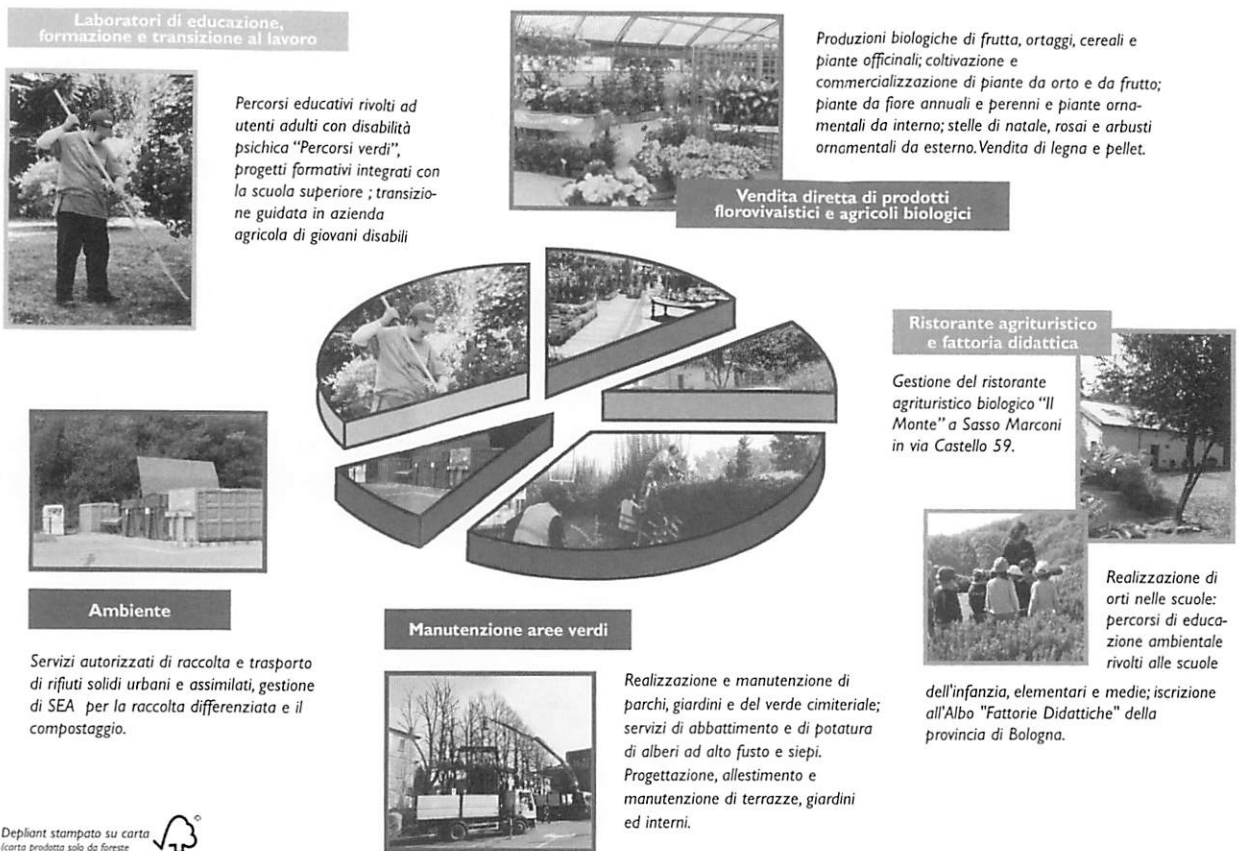
COpAPS 働いており、その内障がい者は12人であり知的障がい者8名(精神障がいの両方ある人も含む)、精神障がい者は4名である。この場所では約23人働いており、残り約33人はここの農園以外で働いている。12名の障がい者はイタリア全土から来ているのではなく、近隣の住民である。

組合員の年齢は35歳から45歳が中心であり、それ以外に研修で来る18歳から25歳の若者もいる。多くの人は近くの実家から通っており、家族がいない人は3部屋ある園内アパートで暮らしている。すぐ横から「チャオ！」と声をかけてくれたク

ラウディオ氏は、直売所の管理をしている組合員であり、直売所も事業のひとつである。主として5つの事業をしている。図表7の右上から順に、野菜や果物・花卉の生産・販売(含直売所)事業、レストラン事業(右中の小さな部分)、メンテナンス事業(下の大きな部分)、ごみ収集事業(左下の小さい部分)、行政からの委託での中度・高度障がい者教育事業(左上の大きな部分)であると説明を受けた。部分の大きさはおおよその事業規模を表している。これからの事業展開も模索しており、社会的協同組合以外の一般企業との連携、直売所の加工品を自ら生産する事業展開、インターネットを使った販売などを進めているとのことであった。

ところでボローニャには、現在約120組合の社会的協同組合があり、90から95組合くらいが活動中であるという。全体で550人の障がい者が雇用されている。コーパップスを始めた1979年頃は5団体ほどしか社会的協同組合がなかったが、現在は多くの団体があり、就労支援システムが普及し

図表7 COpAPSの事業概要



(注) 図表6パンフレットの見開き。5つの事業をおこなっている。

Depliant stampato su carta
(carta prodotta solo da foreste
coltivate e altre fonti certificate)
FSC

写真23 COpAPS 理事長 Lorenzo Sandri 氏



(注) 筆者撮影。左側は広大な農場。右側はハウス。撮影側は建屋がある。

てきて、これらプラス障がい者雇用義務があるので、さまざまな組織で雇用されている。障がい者雇用では重度の精神障がい者を企業が雇用するのは難しい。そこで、賃金等を企業が支払うので、社会的協同組合が代わりに雇用するシステムもあるとのことであった。

屋外でインタビューをおこなっている間、組合員から「ドアを閉めなさい!」と大きな音でドアを閉められたり、陽気に挨拶されたり楽しい時間を過ごした。屋内に移動してエスプレッソを御馳走になり(もちろん砂糖たっぷり)、井上ひさし氏が訪問した時の様子やロレンツォ・サンドリ氏が度々日本を訪問していることなども伺って帰途についた。帰りも理事長自ら送って頂いて、駅でかなり強いハグを頂いた。男性が男性をハグすることはイタリアでは普通のことらしい。

おわりに

～もうひとつの世界のリアル～

精神病院のないイタリア地域社会を、「いまの」世界ではなく、もうひとつの別の世界を目指して活動するリアルな世界として視察してきた。地域の行政・企業・市民団体と障がい者雇用に関する調査を中心に、7ヵ所プラス α を報告し終えて、イタリアは全ての精神病院を廃止し、現在はひとつも残っていないことについて改めて驚いている。

歴史的文化的背景はもちろんだが、フランコ・バザーリア氏たちの運動が大きな影響を与えていた。精神病は脳に原因があるとされていたが、社

会的影響(社会的排除、貧困など)を考慮してマニコミア(全制度的施設=精神病院)に閉じ込めることなく、日本における企業の一種ともいえる社会的協同組合やボランティアを中心に地域で支援することで精神病院を廃絶していた。

世界初の大学が誕生したボローニャの社会的協同組合も重要であり、筆者の専門分野からはサード・イタリアと地域産業といったテーマでも重要な視察であった。本稿は報告記であるが、今後これを機にイタリアはもちろん日本における地域社会と障がい者雇用について継続して考えていきたい。

日本でも約50年前、別府の地にて“*No Charity, but a Chance*”の経営理念を掲げて「太陽の家」が活動を始めた。しかしながら、特例子会社を設立して、そこで障がい者が働く姿に健常者との協働は乏しく、本社で働く障がい者はわずかである。創業者である立石一真氏のリーダーシップによって、オムロンは障がい者を本社で雇用することを目指してきたが、昨今のグローバル化の波の中で断念している。

イタリアの改革による影響は大きく、日本においても障がい者の自立と就労支援の重要性が認識されるようになり、2005年に障がい者の就労支援を推進するための「障害者自立支援法」、2013年には「障害者総合支援法」が制定され、就労移行支援・就労継続支援(A型・B型)が創設された。当事者団体“alticolo32”と連携している鹿児島県の「ラグーナ出版」など日本における具体的取り組みについても早急に訪問したい。

最後に謝辞を記したい。はじめに地域社会研究センターおよびセンター員のみなさまへ感謝を申し上げたい。本調査は当該センターから支援を頂いた。また調査チームに加えて頂いた馬頭忠治教授、調査で訪問させて頂いたすべての関係者のみなさまへ御礼を申し上げます。

なお、本記は編集方針から可能な限りわかりやすく、読みたくなる文章を心がけて執筆した。このような文章を書くのは初めての経験であったため、至らない点がある可能性がある。その節は伏してお詫び申し上げる次第である。なお、本稿の責任はすべて執筆者にあり、コメントや御意見等は筆者宛てに頂ければ幸いである。